

# 「弱い他者」を媒介とした討議の可能性

大 窪 善 人  
牧 野 芳 子

## 【抄録】

本研究ノートでは、大学のアクティブ・ラーニングに連携する関係当事者にとっての利点について注目する。自治体関係者へのヒアリングデータをもとに、学生が参加する特有の意義について、理論的な考察を行った。その結果として、一見、否定的に捉えられる、学生のある種の「未熟さ」の中に、むしろ、討議にとっての積極的な契機を見出すことができるという見解が示された。そして、それは討議民主主義における感情の重要性を指摘する近年の研究によって基礎づけることができる。

キーワード：討議民主主義，ファシリテーター，感情，弱さ

## 1. はじめに

大学のアクティブ・ラーニング（AL）において、地域、企業などの大学外団体と連携した取り組みが行われている。その際に、前提となるのが、大学における学生教育と諸団体との互恵的な関係である。つまり、AL は、学生の一方的な教育、学習機会が提供されるのみならず、一方では、たとえば、地域住民や自治体関係者などにとっても、メリットをもたらすものでなければならない。そうした当事者にとって AL のメリットはどこにあり得るかということが、われわれの問題関心である。

今回検討を行うのは、京都市内の A 大学の取り組みにおいて、PBL 科目として隣県の B 地方自治体と連携し「市民参加型のまちづくり事業」を実施しているケースである。この事業は、行政自治体と市民とが協同して政策を実践していくためのプログラムにおいて、学生が、話し合いの場を準備し、議論を促す「ファシリテーター」として参加するという形式をとっている。

本研究グループが 2018 年に行った当該の B 自治体関係者（市役所職員）へのヒアリングから得られたデータである。ヒアリングの結果、自治体職員から見た学生参加の利点として、以下に示すような語りが得られた。本稿では、このデータについての理論的な考察を試みるものである。

〈職員 C：まず、間違いなく継続して 1 年間、携わってくれるというのは一番の利点やとは思

ますね。授業なので。途中でどっか行くとかじゃなくて、責任感持ってやってくれはと思うんですけど。それこそうちとしては学生だけじゃなくて、色んな取り組み相手がいてもいいのかなと。それこそ市民活動、ちょうど1週間くらい前に、こういう学生さんじゃなくて、別の形での取り組みも色々説明させてもらってるので。色んな人と色んな関わり方が出来ればいいんじゃないかなと。

職員 D：この話し合いの進行役ファシリテーターの役割を、地域の人達でも出来ないかというのでやりだしたりとか、してますけど。学生さんで、そうだなと思ったのが、ならではだと思ったのが、地域の人らが率先して助けたらというか。この間もあるグループの人が、先生もおっしゃってたんですけど、このグループちょっとまずいな、まずいというか、ある意味ちょっと不安というか。ちゃんとまとめてくれるかどうか不安なんやわって、先生自身もおっしゃってたんですけど。よくよく見守ってると、周りの人らが例えば、まとめるのを助けたりとか、促すのを助けたりとかされてるので。そういう意味では集まってくれはる人らが、受け身ではなくて。自分らも進めていかなあかなと。というふうな機運作りにはなるもんなんやなと。学生ならではやなと思いますね。)

## 2. データの考察

利点としては、第一に事業連携の持続性に対する期待が挙げられた。大学の授業プログラムとして行われる性質上、当該の期間、事業の継続が見込まれることが、連携する自治体にとって大きなメリットとなっていることがうかがえる。

他方、二点目に挙げられた利点については、やや意外なものであった。ここでは、学生側がファシリテーターの役割をうまく果たせない場面で、しかし、それがかえって、市民の能動的な参加の契機になったと肯定的に語られているのである。筆者はこの点に注目したい。つまり、一見すれば、否定的に捉えられる、ある種の「弱さ」、あるいは「未熟さ」という特徴の中に、むしろ、積極的な可能性を見出すことができるのではないだろうか。そのことを、学生ならではの特徴として捉えることができるのではないだろうか、と。

## 3. 討議民主主義

学生がもつ特徴がある種の弱さにあると仮定した上で、それを、たんにアドホックな出来事としてみなすのではなく、それがどのような理論的な意味を持つのかについて考えてみたい。そのために、まずは A 大学の取り組みである「市民参加型のまちづくり事業」についての基本的な前提を確認しておく必要がある。そもそも、なぜ行政が行う政策決定過程に市民参加が求められるのだろうか。

本事業で念頭に置かれるのは、討議民主主義（deliberative democracy）という概念である<sup>(1)</sup>。討議民主主義とは、一般に、理性的な討議を通じて集合的な合意を目指す政治のあり方を指すものであり、市民の実質的な政治参加として理解される。通常、政治参加といえばもっぱら選挙における投票に限定されてきたが、現代社会における問題の複雑化や人々のニーズ多様化などを背景に、市民が様々な形で政治的な議論や政策決定への参加が実践されるようになってきた。欧米においては、コンセンサス会議（デンマーク、オランダ、イギリスなど）、プラーヌクツェレ（計画細胞、ドイツ）、討論型世論調査（米国など）、と様々な形で実践、あるいは制度づくりが行われている（新田、52頁）。

討議民主主義にもとづく話し合いにおいて、重要な役割を果たすのがファシリテーター（facilitator）である（前掲、57頁）。ファシリテーターとは、市民の自発的な意思・意見形成を促進する役割を果たし、よりよい議論のために人々を上手く動機付け、議論を水路づけることが求められる。

しかし、何がよりよい議論であるのかは必ずしも自明なものではない。なぜなら、話し合いにおいては、様々な意見が拮抗し得るからである。あるいは、逆に、法学者 C・サンスティーンが指摘するように、比較的同質的な集団では、議論が深まらず、すぐに思いつきそうな、ありきたりな結論に帰着してしまうということが生じがちであることが知られている（サンスティーン、2012）。こうした「集団浅慮」をいかに回避し得るかが、討議をより実りあるものにする際の要点になってくる。そこで注目されるのが、討議参加者の感情的側面へのアプローチである。

#### 4. 弱い他者による討議の媒介

討議の失敗の一因は「自動システム」という人間の思考様式にある。自動システムとは直感や本能、または習慣的なもので、近年の認知科学や行動経済学の研究では、人間の判断や行動がいかに情動や習慣といったものに影響を受けているかが明らかにされてきている。たとえば、話し合いにおいて、権威があるとみなされる人の発言に対して、その内容の妥当性とは無関係に、反対意見を表明しにくいという現象もこの点から理解できる。村田哲樹は、サンスティーンらの議論を引き継ぐ形で、そうした環境に左右されやすい感情の逆用の可能性について指摘する（田村、2017, p.78-9頁）。すなわち、人々の「自動システム」的な思考を、合理的、理性的な思考形式である「反省システム」へとうまく切り替えてやることを意味している。

しかし、強調されるべきは、それは、ただちに感情的な観点を討議の場から排除するわけではないということである。なぜなら、後述するように、かかる感情が合理的な討議参加への動機づけを与え得るからである。こうした観点でファシリテーターの役割について考えれば、ファシリテーターとは、参加者のある種の感情を惹起する存在でもあるということになる。つまり、単なる議論の交通整理や中立的な観察者というだけではない。むしろ、議論への介入し異なる意見を

注入することで、議論の場を「攪乱」させるという手法も取り得る（新田、前掲、60頁）。そのためには、ファシリテーターが参加者に対して行う感情的動機づけが有効であろう。そのことによって、新たな発見や驚き、気づきが得られることが期待される。

さて、その場合、ファシリテーターは議論の参加者からみて、いわば攪乱要因としての他者として現れる。それでは、A大学の場合、ファシリテーターとしての学生は、どのような他者として理解することができるだろうか。筆者は、先述の通りその特徴を「弱さ」、「未熟さ」とみなしておいた。ここでは、その仮定を展開してみたい。

## 5. 理性的討議の前提条件としての感情

ここで「弱い他者」と呼ぶのは、具体的に言えば、議論内容についての非専門家、アマチュアを指す<sup>(2)</sup>。他方、その反対の、いわば「強い他者」は、たとえば、医師、教師、学者といった、何らかの専門知や技術についての権威を指す。だが、冒頭に示したヒアリングでみた学生が持つ積極的（と受け取られた）特徴は、前者の概念に親和的であると考えられる<sup>(3)</sup>。

ところで、では、なぜ「弱い他者」の介入が討議の場を活性化し得るのだろうか。それは、討議における感情を規範的に評価しようとする議論によって、基礎づけることができるだろう。そもそも、古典的な政治理論においては、感情は、理性や徳、利益といった公的な関心によって、もっぱら統御されるべき対象とみなされてきた（齋藤、111頁）。しかし、公と私との境界は、たとえば、性的マイノリティによる社会運動にもみられるように、じつは曖昧である。つまり、何が公共的な問題であるのかは、その都度、再考されなければならない問題だということである。そこでさらに重要な観点は、新たな異議申し立ては、たんなる客観的認識から発するのみならず、むしろ、当事者やその関係者にとって、自ら、あるいはその仲間や集団が正当な扱いを受けていないということに対して生ずる、感情的側面に動機づけを持ち得るということである。

W・コノリーは感情の持つ積極的可能性に注目する論者の一人である。まず、彼は、ヨーロッパによる「新大陸」の「発見」を例に取りながら、人間のアイデンティティとは、自分とは違う他者との差異の自覚によって形作られると論じる。ここに、民主主義的な討議と感情とを結びつける契機がある。というのは、一方で、民主主義とは、特定の共同体市民のメンバーシップを前提とするからである。しかし、他方、民主主義（とりわけ討議的な民主主義）は、差異や多様性に敏感であるという特徴も持つ。

こうした両方の側面を、コノリーは二つの感情的表現として解釈する。前者の集合的アイデンティティを強化、固定化する方向に対応するのは、ルサンチマン（ressentment）である一方、後者では、憤懣（resentment）が対応させられる。ルサンチマンが、特定の他者に対する妬み、嫉みといった負の感情であるのに対して、憤懣は、現状の不充分さに対する憤り、現状をよりよく変えていこうとする積極的な感情である（前掲、齋藤、121）。この議論に従えば、不満の感情

一般が悪として退けられるのではなく、問題は、いかなるタイプの感情を公共的な理性的討議へと結びつけるのが合理的かという課題なのである。

以上の観点からみれば、討議におけるある種の感情的な働きかけが、全く不当なものとは言えないことが理解できる。そして、あり得べき感情的働きかけが意図するのは、議論参加者のアイデンティティの流動化だということである。ここに、「弱い他者」として位置づけた学生のケースを当てはめて考える余地があり得るのではないだろうか。

#### 注

- (1) A 大学の本事業は、討議民主主義の議論を踏まえた上で、企画、設計されているものであることを、当該授業担当教員の口頭での発言により確認している。
- (2) 「弱い他者」には、この他にも、コミュニケーションが難しい、知的障害者や動物なども含まれ得る。この観点については以下を参照。湯本真純「政治的主体としての発達障害者：討議デモクラシー論の陥穽とコミュニケーション障害」常盤台人間文化論叢, 2015, 69-84。しかし、ここでは、あくまでも当該のケースにおける学生の位置づけを明らかにするという目的に限定したい。
- (3) もちろん、ここでは学生の未熟さを単に肯定したいのではなく、たとえ企画・設計者の意図を超える偶発事象であるとしても、それが持つ積極的な可能性にしたいというのが本稿の趣旨である。

#### 参考文献

- Connolly, William E., "Identity/Difference", 1992, Cornell Univ Pr (杉田敦・齋藤純一・権左武志訳『アイデンティティ／差異』岩波書店, 1998 年)
- Fishkin, James S., "When the People Speak", 2011, Oxford University Press (曾根泰教 監修・岩木貴子訳『人々の声が響き合うとき』早川書房, 2011 年)
- Fishkin, James S., Ackerman, Bruce, "Deliberation Day", 2005, Yale University Press (川岸令和・谷澤正嗣・青山豊訳『熟議の日』早稲田大学出版部, 2016 年)
- Heath, Joseph, "Following the Rules", 2008, Oxford Univ Pr on Demand (瀧澤弘和訳『ルールに従う』エヌティティ出版, 2013 年)
- 堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社, 2004 年
- 田村哲樹『熟議民主主義の困難』ナカニシヤ出版, 2017 年
- 新田和宏「ワークショップという熟議民主主義」近畿大学生物理工学部紀要 17, 51-62, 2006
- 齋藤純一「感情と規範の期待」飯田隆他編集『講座 哲学 10 社会／公共性の哲学』岩波書店, 2009 年, 109-127 頁
- サンスティーン, キャス, 監訳『熟議が壊れるとき』勁草書房, 2012 年
- Tocqueville, Alexis de, "De la démocratie en Amérique", 1835-1840, Createspace Independent Pub (松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』岩波書店, 2005-08 年)
- Walzer, Michael, "Politics and Passion", 2006, Yale University Press (齋藤純一・和田泰一・谷澤正嗣訳『政治と情念』風行社, 2006 年)
- 柳瀬昇『熟慮と討議の民主主義理論』ミネルヴァ書房, 2015 年

(おおくほ よしお 共同研究嘱託研究員／佛教大学非常勤講師)  
(まきの よしこ 共同研究嘱託研究員／佛教大学研究員)